燎原の火の如く—明治20年代の教勢伸展—（その2）

天理大学附属天理図書館
天理教文献室
早田　一郎　*Ichiro Soda*

明治20年代の本教が「燎原の火の如く」またたく間に日本中に伝播したのは遠隔地布教によるところが大きい。遠隔地布教とは明確な布教意欲を持ち、それまでの居住地から遠く離れた所で布教活動を行うことをいう。遠く離れた所とは簡単に戻れない所である。それまでの生活をなげうって、家族と離れひたすら神様へのご恩に報いるため、毎日を布教おたすけに捧げた人がたくさんいた。こうした遠隔地布教は明治20年頃から始まるが、明治23年以降次第に盛んになり20年代後半には遠隔地へ赴く布教師が全国至る所に輩出する。

本教の教会制度は明治21年に始まったが、10年を経ずして明治29年末までに沖縄を除く46道府県に教会が設置されたことはすでに述べた。なんという早さであろう。奈良およびその近府県に数年で教会ができるのは理解できる。しかし、5年や6年で北海道や九州にまで教会ができたのである。風説が伝わっていくことを想像してみよう。そんなに早くは伝播しないだろう。やはり遠隔地布教という猛烈なエネルギーにより強い炎となって燃え広がったことを考えねばならない。（遠隔地布教についてはいずれ詳しく述べる予定である。）

明治20年代における教会設置の広がりを時間の経過にしたがい考えてみたい。

まず、教会が設置された地域（県）を各年ごとに挙げる。明治21年、22年には近畿の奈良、兵庫、大阪、京都、滋賀、三重および静岡、徳島、東京の各府県に教会が設置されたが、その数は大阪、東京がそれぞれ3、他は各1と僅少であった。

続く23年、24年には新たに福井、千葉、和歌山、岡山、高知、愛媛に新設教会があり、21、22年に教会が設立されていた所もそれぞれ増加した。

さらに明治25年は1年間に143の教会が設置され、新たに茨城、栃木、群馬、埼玉、岐阜、石川、広島、大分へと広がった。

明治25年末の教会数は近畿（三重を含む）全体で125カ所に上る。日本全体が193カ所だから65パーセントが近畿に集中していた。その他の地域で多いのは四国、東海、関東で、東北、北海道、甲信越にはまだない。

明治26年になると北海道、神奈川、山梨、長野、鳥取、山口、福岡、長崎に初めての教会が誕生する。この時点でも東北各県には1カ所もなく、九州もまだ少ない。

明治27年、28年の2カ年で注目すべきことは、それまで皆無だった東北に初めて教会ができたことであり、なおかつ2年間に福島、宮城、山形、岩手、青森に合わせて37カ所もの教会が新設されたことである。また九州も明治28年末には合わせて53カ所の教会となった。（教会数は複数の「教会名称〈所在地〉録」により割り出した。）

明治29年はこの年だけで418もの教会が設立され、日本全体で1,348カ所（『第3回天理教統計年鑑別冊』【註】）となり、分布地域は前述した通り、沖縄を除く46道府県に及ぶ。

明治29年末の教会はやはり近畿各県に多く、合わせて542カ所に上る。しかしこれは日本全体の40パーセントで、明治25年末の65パーセントと比べ、日本全体に占める割合が小さくなった。明治20年代の前半は教会本部に近い近畿と東海、徳島、高知、東京などに広がり、後半になるにしたがい遠方に伝播された状況を表している。

ちなみに明治29年末、教会の多かった所は兵庫118、大阪97、奈良92の順で、少ないのは沖縄0、秋田1、富山3、宮崎、鹿児島各4である。

「天理教」の看板を掲げた教会が全国各地に現出すると世間の人々は驚きの目を見張ったことだろう。ただ驚くばかりではなく、このまま放っておいていいのかと恐怖感を抱いた人もあったのではないか。その結果、本教への反対、攻撃が各地に現れ、本教教勢拡大に比例するように強くなる。

教祖ご在世時代にも反対、攻撃はあったが主に教祖やおやしきの人たちに対してのものだった。しかし、明治23、4年になると奈良以外でも見られ、より大きな力で圧力をかけてくる。最も大きな力で圧力をかけてきたのは前号に触れた通り仏教の人たちだった。ある寺院では「天理教撲滅講演会」を催し、村人を半ば強制的に参加させたという。一方、天理教の元気な人たちは向こうを張って「天理教講演会」を開いたこともあった。しかし、多くの天理教者は世間の反対、攻撃に黙って耐え忍び、ひたすらおたすけに精を出した。

あまりにひどい仕打ちを受けた時、天理教者は「おさしづ」を伺った。これに対する神意は、信仰者たちを励ます温かい親心であった。このお言葉に力を得、神様の思いに沿うよう一層おたすけに邁進したのであろう（橋本武『おさしづを拝す上』）。

当時の信仰者たちはいつでも神意を伺い、教祖と一緒に歩いているとの実感を持っていたのではなかろうか。そうならどんな厳しい仕打ちを受けても、それに立ち向かう勇気を得ていたと考えられる。

このような真面目でひたむきな信仰心はどこからくるのだろう。この時代の布教師たちの姿勢を考える上で注目すべきことは、布教伝道に駆け回った人の多くが信仰初代の人たち、すなわち自らがこの信仰で助けられた人たちだったという点ではないだろうか。

自分が直接救済に浴し、信仰的回心を経た人たちは何事にも動じない強い精神を持ち、ご恩返しのためおたすけに駆け回った。明治20年代、布教師の多くがこのような人たちだった。活気あふれる状況が教団の空気であったと言える。

信仰集団として、親から受け継いだ信仰を持つ人たちと自らの意志で入信した初代の人たちが、同じ教団に居てこそ活気が出る。もし二代、三代の人だけであったり、その逆に新しい人ばかりでは活気あふれる状況とはならないのではないか。

教会や各種の会活動で、顔ぶれに変化がなく、いつも同じ人たちばかりであれば安易にながれ発展がない。ところが、たえず新しい人が加わる会や組織であれば向上心が起こり、良質の緊張感や活気があふれる組織になるのではないか。信仰初代が多く存在した明治20年代の本教はそんな集団だったと思う。

これは現在の我々にとって参考にすべきことである。代々の信仰を受け継いできた人たちと新しく入信した人が同じ仲間として存在することにより活気あふれる雰囲気が作られる。

【註】「教会名称録」で確認できる教会数は若干少なくなる。